

本科（食物栄養科・保育科）学力検査等の内容や試験問題（試験問題、解答又は解答例、出題意図）、合否判定の方法及び基準）

●2024年11月23日（土）実施分

・対象となる入学試験

一般推薦入試（学校選抜型）、系列高等学校入試（学校選抜型）、社会人（I期）入試

（*自立支援入試（総合選抜型）、外国人留学生入試（特別選抜）、帰国生徒入試（特別選抜）、大学中退者入試（特別選抜）

（注）*印は同日開催の予定であったが志願者がいなかったため実施せず。

・自己表現文試験問題及び出題意図

<問題①>

玄田有史著『希望のつくり方』 p117-119 岩波新書

（著作権の都合により掲載は控える。）

<問題①の出題意図>

課題文は、受験生と同年代の若者が、職場の方々に支えられながら挫折を乗り越え、社会人として伸びていく過程を記したものである。文中の人物が、自らが選択した専門分野において多様な人々と協働して行動する姿は、本学のアドミッション・ポリシーと重なるものである。この課題文を基に、自身のこれまでの経験を踏まえつつ、本学への入学後、どのような意識と態度で学生生活を過ごし、専門性を獲得しようと考えているのか、論理構成や論旨の一貫性に配慮しつつ表現することを期待した。

受験生が「自己を表現する力を有している」かどうか、また受験生それぞれどのような「専門分野への関心」を持ち合わせ、本学での学びにつなげたいかを把握できる課題文である。

<問題②>

朝日新聞 2024年3月26日 天声人語

（著作権の都合により掲載は控える。）

<問題②の出題意図>

課題文は、入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）の「自己を表現する力を有している人」、「専門分野への関心を有している人」であることを表現できる内容とした。課題文は、日本の食文化、食材の旬、素材を活かした調理、食と生命の大切さについて考える機会を提供している。そこで、自らが考えたこと、自らの食体験も交えた自己表現文を作成することで、食物栄養科の専門分野である「食と健康」への関心、および保育科の専門分野に関わる内容として「食育」を通じて「幼児教育で扱う『食の大切さ』」を問うものとした。

●2025年2月2日（土）実施分

・対象となる入学試験

一般選抜A入試（一般選抜）

・試験問題及び出題意図

<全体>

一般選抜（個別テスト）では、本学のアドミッション・ポリシーに基づき、入学後の各学科での学びにつながる基礎学力である「知識・技能」と、問題を多角的にとらえて、適切に判断し表現することができる「思考力・判断力・表現力等の能力」を重視した問題を出題している。

2025年度の各科目のそれぞれの出題意図は以下の通りである。

<国語（近代以降の文章のみ）>

本科目において、「知識・技能」については主に漢字の知識や文脈に沿った語句の運用力等を問う問題を出題し、また「思考力・判断力・表現力」については文章の読解力と論理的な文章表現力を問う問題を出題した。入学する学部は様々であっても、大学ではそれぞれの専門分野の文献や資料を読み解いていくこととなります。そのため国語の学力試験では、そのような専門的な文献や資料を読み解くための力が身につけているかどうかをはかる必要があります。したがって高等学校卒業までに、漢字や語句の知識やそれらの運用能力、またさまざまな文章を読み解く力を身につけなければならない。

出題範囲は、高等学校学習指導要領（平成30年告示）「現代の国語」「言語文化」の範囲とし、本学では論理的な文章読解力と文章表現力を重視しているため、「現代の国語」「言語文化」の教科書の内容と同程度の難易度の文章をもとに「論理的な文章」を題材とし、両科目の教科書で学んだ知識と能力を用いて正答を導き出すことができる程度の問題を出題した。

<英語コミュニケーションⅠ、英語コミュニケーションⅡ、論理・表現Ⅰ>

本科目では、今日の社会問題や多様な出来事に関する文章を適正に理解するためや、同意・反意などの簡潔な英文や英会話の完成するための語彙・文法・表現・言語の機能などの知識と運用力を習得できているか、またその背景にある多文化的な知識の有無を測定することで、総合的な英語運用能力を評価する問題を出題した。また、英語の慣用句等の表現の理解とそのことについて日本語での表現が適正か否かを測定することで、英語表現の知識の有無と、言語間の表現力を評価する問題も出題した。

<数学Ⅰ、数学A>

本科目では、高校数学の数学Ⅰ・数学Aの範囲内で、数学の基礎学力が身につけているかを判定することを目的としている。一般的な教科書に基づく基礎的な知識を前提とし、計算力や論理的思考力を問う問題を出題した。対象となる範囲は、数学Ⅰの「数と式」「二次関数」「図形と計量」「データの分析」、および数学Aの「場合の数と確率」「図形の性質」の6分野である。

各分野の出題数は以下のとおり。

- ① 「数と式」：小問 5 題
- ② 「二次関数」：小問 5 題
- ③ 「図形と計量」および「図形の性質」：小問 4 題
- ④ 「データの分析」：小問 3 題
- ⑤ 「場合の数と確率」：小問 3 題

合計 20 題 を出題し、各問題は、基礎的な内容の理解力や計算力を問うものに加え、応用力を試す問題で構成されている。

<歴史総合・日本史探究>

【一般的方針】

2025 年度の「歴史総合・日本史探究」の問題は大問 1、2、3 で構成され、全体で 100 点満点とする。

【歴史総合部分】

「歴史総合・日本史探究」の大問 1 は、歴史総合型の問題であり、近現代史を対象とし、日本や世界の出来事やその背景、その後の影響、日本と世界の関わりなどについて出題した。また、大問 1 は、思考力・判断力を問う問題であり、提示された資料等を手がかりとして、学んだ知識と組み合わせることで解答を導く問題、歴史の流れの理解や影響関係を前提として解答を考える問題を出題した。

【日本史探究部分】

「歴史総合・日本史探究」の大問 2・3 は、日本史探究に相当する問題であり、入学後に必要な継続的に学習を行うことのできる「知識・技能」および「思考力・判断力」を評価するため、日本の原始・古代から近代に至るまでの法や政治、経済、文化、国際関係に関する幅広い日本史の基礎的な知識と理解を測ることとする。そのため、高等学校の教科書の記述内を出題範囲としながら、教科書等で掲載されていない資料に基づいて高校の授業で学んだ内容の理解度を測る出題がなされることもある。

2025 年度は、日本の原始・古代、中世、近世、近代における法と政治、経済、文化、国際関係に関して、大問 2 はまとまった長文を読み、それに関連する用語や基礎知識の理解を問う問題を出題し、大問 3 はある範囲のテーマに関して、一問一答形式で基礎用語や基本知識の理解を問う問題を出題した。

<歴史総合・世界史探究>

【一般的方針】

2025 年度の「歴史総合・世界史探究」の問題は大問 1、2、3 で構成され、全体で 100 点満点とする。

【歴史総合部分】

「歴史総合・世界史探究」の大問 1 は、歴史総合型の問題であり、近現代史を対象とし、日本や世界の出来事やその背景、その後の影響、日本と世界の関わりなどについて出題した。また、大問 1 は、思考力・判断力を問う問題であり、提示された資料等を手がかりとして、学んだ知識と組み合わせることで解答を導く問題、歴史の流れの理解や影響関係を前提として解答を考える問題を出題した。

【世界史探究部分】

「歴史総合・世界史探究」の大問2・3は世界史探究を基礎とした問題である。大問2では、課題文を示して空所を補充することで、特定テーマの概括的な理解を確認しながら、理解を促すようにしている。また、課題文の下線部についてより深い理解を確認する問題を出題した。なお、出題テーマとしては、現代社会への理解を深めるという観点から、近現代社会の起点となった大交流時代、及び東西ヨーロッパ社会の分裂の起点となるフランク王国の成立について出題した。また、国際社会において影響力が高まる中国について、皇帝独裁体制が成立し、周辺諸民族との関わりがクローズアップされる宋朝から出題した。大問3は、一問一答形式をとることにより、基礎的な知識を確認している。出題テーマは、現代社会の基盤となっている中世から近代のヨーロッパの政治・経済・文化などから出題した。

<公共、政治・経済>

本科目では、日本や世界を取り巻く政治や法などの社会の仕組みや経済に関する基本的理解の有無や社会問題に取り組むための思考力・判断力を評価する。いずれの問題も高校生が教科書をベースとして通常の学習をした場合に解答が可能な問題を基本とするが、一部教科書に記載のない時事問題を出題する場合がある。ただし、時事問題を出題する場合には、近時ニュースになった話題に関する問題など、現代社会において一般的に認知されている問題とする。

2025年度の問題は大問1、2、3で構成され、全体で100点満点とする。大問1は、思考力・判断力を問う問題であり、提示された資料等を手がかりとして、学んだ知識と組み合わせることで解答を導く問題を出題した。大問2は、政治や法、経済についてのテーマに関するまとまった長文を読み、それに関連する用語や基礎知識、社会問題の理解を問う問題を出題した。大問3は、ある範囲のテーマに関して、一問一答形式でその基礎用語や基本知識の理解を問う問題を出題した。

<化学基礎>

入学後に各学部の講義を理解するために必要な基礎的な学力を有するものを選抜する。出題は、高等学校の化学基礎で学習する内容の中で基礎的な内容を中心とし、稀に発展的内容も含まれており、実験内容や実験結果を読み解く問題も出題する。これは、科学的な視点から考えることができるか、論理的な思考ができるかを判断することを目的としている。

出題範囲は、化学基礎の内容で、①化学と人間生活（化学と物質）、②物質の構成（物質の構成粒子、物質と化学結合）、③物質の変化とその利用（物質と化学反応式、化学反応、化学が拓く世界）の3つの範囲である。

<生物基礎>

入学後に各学部の講義を理解するために必要な基礎的な学力を有するものを選抜する。出題は、高等学校の生物基礎で学習する内容の中で基礎的な内容を中心とし、稀に発展的内容も含まれている。また、与えられた資料やデータから自ら思考・解析する能力を有するものを選抜するために実験結果を示した表やグラフを読み解く問題を出題している。これは、科学的な視点から考えることができるか、論理的な思考ができるかを判断することを目的としている。

出題範囲は、生物基礎の内容で、①生物と遺伝子（生物の特徴、遺伝子とその働き）、②生物の体内環境の維持（体内環境の維持の仕組み、免疫）、③生物の多様性と生態系（植生の多様性と分布、生態系とその保全）の3つの範囲である。

●2025年2月7日（金）実施分

・対象となる入学試験

一般選抜B（Ⅰ期）入試（一般選抜）

（*社会人（Ⅱ期）入試（社会人選抜）、外国人留学生入試（特別選抜）、帰国生徒入試（特別選抜）、
大学中退者入試（特別選抜））

（注）*印は同日開催の予定であったが志願者がいなかったため実施せず。

・自己表現文試験問題及び出題意図

<問題①>

仙田満著『子どもとあそび』 p2-4 岩波新書

（著作権の都合により掲載は控える。）

<問題①の出題意図>

課題文については、高等学校卒業までに獲得した国語力で十分に読み取れる内容・文体である。取り上げられている内容は、子どもたちのあそび空間、あそびの場所に関するもので、それほど苦労しないで自分の考えや思いをまとめることが可能である。受験生が「自己を表現する力を有している」かどうか、また受験生それぞれどのような「専門分野への関心」を持ち合わせ、本学での学びにつなげたいかを把握できる課題文である。

また、本学の学生の多くは、卒業後「子ども」にかかわる職業に就く割合が高く、受験生が、子どもの生活に対してどのような思いや意識をもっているのか、その一端を把握することにも資する文章である。

<問題②>

齋藤孝著『頭のよさは国語力で決まる』 p210-211 大和書房

<問題②の出題意図>

課題文は、褒めることは自己肯定感を高める力を持つこと、より効果的に褒めるためには観察力や気づく力が必要であることを述べている。また、褒めるには、相手の感情を読み取り、話をよく聞くことが大切であるとも記している。これらのことは、本学が養成する専門職の仕事にも求められることである。観察、気づき、それをもとにした適切な働きかけと自身の目指す専門分野との関連性について、これまでの経験や知識をもとに、自分の言葉で考えを表現することを求めた。

●2025年3月7日（金）実施分

・対象となる入学試験

（*一般選抜B（Ⅱ期）入試（一般選抜））

（注）*印は同日開催の予定であったが志願者がいなかったため実施せず。

専攻科保育専攻（Ⅰ期：学校選抜型）の学力検査等の
内容や試験問題（試験問題、解答又は解答例、出題意図）、
合否判定の方法及び基準）

●専攻科Ⅰ期入試：学校選抜型

・試験問題 1（60分）

問 1. あなたが専攻科への進学を希望する理由を述べてください。

問 2. X幼稚園のZ園長は、子どもに対する教育について早期実施の必要性を教職員に説いています。特に英語教育については、外国人の教員を積極的に採用してすべて日本語を用いず英語のみの時間を設けています。保護者からも英会話スクールのレベルであると好評です。

ある日、その園の年中クラスを担当するV教諭が、子どもの日本語の発音（イントネーション）がおかしいことに気がきました。

① もしあなたが、このV教諭の立場だとしたら、どのような対応をしますか。それは、どのような考え・理由によるものですか。

② もしあなたが、V教諭から子どもたちの日本語の発音の違和感について報告された主任教諭だとしたら、どのような行動をとりますか。また、それはなぜですか。

問 3. 以下の図表は、子ども（1～6歳）の発達について、2010年と2022年における状況の経年比較を示したものです。この図から、子どもの発達の特徴を読み取り、それに対するあなたの考えを述べてください。

図表 子どもの発達（年齢別 経年比較）※引用文献示す 第6回幼児の生活調査アンケート ベネッセ総合教育研究所

図表 1-6-1 子どもの発達（年齢別 経年比較）

		(%)															
		1歳児		2歳児		3歳児		4歳児		5歳児		6歳児					
		10年 (538)	22年 (611)	10年 (479)	22年 (620)	10年 (537)	22年 (620)	10年 (561)	22年 (620)	10年 (494)	22年 (620)	10年 (503)	22年 (620)				
食事マナー	コップを手でもって飲む	63.6	<	75.6	96.0	95.1	95.8	99.3	96.1	99.2	95.9	99.0	94.4	98.5			
	スプーンを使って食べる	60.7	<	69.0	95.5	96.2	95.6	98.9	96.1	99.0	95.5	99.5	94.2	<	99.4		
	おはしを使って食事をする	3.3	3.5	37.5	>	26.8	64.7	>	57.2	82.0	>	73.4	90.9	>	85.2	93.8	91.6
	歯を磨いて、口をすすぐ	11.9	8.4	66.5	>	51.8	85.8	82.0	93.4	92.7	93.8	95.8	93.8	94.3			
排泄	おしっこをする前に知らせる	4.1	5.8	22.6	19.2	82.2	>	76.2	95.2	96.6	94.7	97.2	94.0	96.8			
	オムツをしないで寝る	0.9	1.5	4.8	3.9	43.9	>	34.4	70.8	68.9	81.9	80.7	88.5	89.4			
	自分でうんちができる	6.1	<	24.6	24.0	<	35.4	73.6	71.3	91.8	91.9	93.3	94.3	94.2	95.1		
	自分でパンツを脱いでおしっこをする	1.7	3.2	17.4	14.7	77.5	72.8	95.0	96.3	94.7	97.9	94.4	96.3				
生活習慣	家族やまわりの人にあいさつをする	39.5	40.4	81.2	>	74.5	87.5	88.5	91.4	91.1	92.3	94.8	91.5	91.7			
	決まった時間に起床・就寝する	50.5	<	71.9	63.7	<	75.3	66.9	<	79.2	79.5	<	85.5	82.9	87.0	81.9	84.9
	一人で洋服の着脱ができる	2.2	5.4	25.4	<	36.8	64.5	<	77.8	90.9	93.8	93.9	97.2	94.0	94.7		
	一人で遊んだあとの片付けができる	14.3	<	27.8	44.4	<	61.4	65.5	<	72.1	79.3	83.5	84.7	89.2	85.7	86.9	

注1) 「できる」の%。

注2) 満1歳以上の子どもをもつ母親の回答のみ。

注3) 10年、22年調査の結果を比較し、10ポイント以上の差があったものは濃い網掛け、5ポイント以上10ポイント未満の差があったものは薄い網掛けをした。

注4) () 内は人数。

注5) 0歳6か月～6歳11か月の年齢層で分析する際のウェイトを用いて集計した。

・試験問題1の解答例

問1. 私が専攻科への進学を希望する理由は保育の知識を増やし、スキルを高めたいからである。短期大学で学んだことを生かしながら、専攻科での活動に取り組んでいきたい。また、週に1度の研修があり、実際に現場に行くことで、実習だけでは学べないことも多く学ぶことに魅力を感じた。

私が山梨学院幼稚園に実習に行ったとき、専攻科生がインターンで来ていて、毎週、紙芝居の読み聞かせをしたり、子どもたちが楽しく遊べそうな教材をつくったりする姿を見て、憧れを抱くとともに、園児理解はもちろん、教材を考える力、想像力や発想力も同時に身に付けることができると思った。それに加え、1日の流れや保育者の仕事、保護者との関わりも把握し、実際に就職した時と同様に園の仕事に関わることができるため、自分のためになる素晴らしい研修機会だと感じた。

進学後は、授業や研修、たくさんの実践的な活動を通して専門的知識を増やし、よりステップアップした保育者になることが夢である。そのために日々の授業に積極的に参加し、研修ではその日の反省をしっかりと行い、次の週の研修で課題を活かし、毎週、実践知を更新させていきたい。幼稚園教諭1種免許用取得を目指し、日々努力していきたい。

問2.

① 私がV教諭の立場であれば、子どもが発音を聞き取りにくい可能性や発音が英語の発音と混ざってしまっている可能性などの複数の予測を立て、クラス内では席を前方に動かし聞き取りやすくする配慮、教員内では情報共有によるその子自身のイントネーションへの違和感が、1人の共有の判断によるものではないかと言う再確認や対応へのチームでの検討、そして保護者の方への報告を行う。保護者の方に報告する際は、急な発覚で驚いたりショックを受けたりしないよう、日常的にその子がそのような発音をしているのか、耳の聞こえに不自由がないかなど、少しずつ保護者の方と子どもの生活場面から聞いて把握する。その後、もし英語の発音と混ざっている可能性が考えられる場合は、英会話スクールから一時的に日本語クラスの方へ移動したり、教員が個別で日本語の発音の仕方を確認する時間を1日に1回設けたりと保護者の方とその子自身が納得できる形で発音の改善を図ることができるよういくつかのパターンを提案するべきだと考える。これらの対応は教諭1人の判断で行ってしまう事は対応の幅を狭める可能性があるため、共有全体で検討していくべきだ。

② また、私が主任教諭の立場であれば、対象の子どもの発音が成長後にも残ってしまわないよう吸収の良い幼児期になるべく早く対応策を考える。対応策を考える上ではその子をよく知るV教諭との相談やクラスの移動に備えて、日本語クラスの教諭の設置を検討するとともに、英語教育の早期実施による発音の混在が他の子どもたちにも発生していないかという確認や見直しを行うことで、対象のみならず子どもたちを全体的に見て改善への対応へ移ることができるようにする。これは対象の子とその保護者がこれまでのやり方から変わってしまうかもしれないと言う不安をなるべく軽減させるための早期対応であり、早期的な英語教育を見直すことで、子どもたちのも日常的な育ちを保障するためにも必要なことであると考え。主任教諭は共有をまとめる立場として、このように広い視野を持って情報共有対応を行うべきだ。

問3. この図表では、注3)にあるように、2010年と2022年調査の結果において10ポイント以上の差があったものに濃い網掛けが施してある。そこで、濃い網掛け部分を見てみると、1歳児から6歳児のうち、1歳児、2歳児、3歳児にのみ濃い網掛け部分が存在する。このことから、まず、3歳以下の子どもに、12年間の間に大きな発達の変化が見られたということが分かる。その内容は、例えば1歳児であれば、「コップを手でもって飲む」ことが、2010年の63.6%から2022年の75.6%へ増加していることが分かる。また、1歳児においてとりわけ大きな変化が見られたのが、「自分でうんちができる」という項目で、12年間で18.5%もの増加が確認できる。このことは、特に大便の排泄に関するしつけに対する意識が、保護者ないし保育者の間で高まったことで、子どもの発達に大きな影響を与えていることを示しているのではないだろうか。

また、2歳児は、「食事マナー」のうちの2項目が12年間で減少し、それに対して、「生活習慣」のうちの3項目が12年間で増加している。このデータからは、2歳児の発達において、食事マナー（「おはしを使って食事をする」、「歯を磨いて、口をすすぐ」）のしつけや指導がおろそかになり、逆に、生活習慣（「決まった時間に起床・就寝する」、「一人で洋服の着脱ができる」、「一人で遊んだあとの片付けができる」）のしつけや指導が徹底されるようになったことを示している。これらの変化の背景には、おそらく、社会的な情勢や、子どもの養護・教育に対する大人の側の意識の変化が存在すると考えられるが、それらに関する実証的なデータはこの図表からは読み取ることができない。しかし、いずれにせよ、子どもたちの発達に与える保護者や保育者の関わり方の影響は非常に大きいため、12年間で隔てて子どもたちの発達の傾向に差が認められることは事実である。これらを踏まえて、子どもを保育することの意義と責任を理解し、日々の保育を営む必要があると考えた。

・試験問題1の出題意図

問1. 専攻科保育専攻への進学を希望する理由について、動機、身に付けたいこと、将来の展望など、明確に自身の考えをもっているのかを判断するため

問2.

- ① 幼児教育における適切な対応の重要性と、教育の効果や問題点をどう捉えるかを判断するため。
- ② クラス担任と主任教諭の立場でそれぞれの対応を問うことで、教育者が現場で直面する問題にどのように対応するか、自身の考えを判断するため。

問3. 統計のデータを正確に読み取り、客観的な指標のもとで、子どもの発達の特徴を捉えることができるかどうかを判断するため。

・試験問題 2

過去 2 年間分の「保育士試験」の問題を参考にして、「保育原理」 5 問、「教育原理」 3 問、「社会的養護」 2 問、「子ども家庭福祉」 5 問、「社会福祉」 5 問、「保育の心理学」 5 問、「子どもの保健」 5 問、「保育実習理論」 5 問の、合計 35 問を出題。

(著作権の都合により掲載は控える。)

・試験問題 2 の解答例

(著作権の都合により掲載は控える。)

・試験問題 2 の出題意図

保育士試験で出題される問題と類似した問題に対して一定以上の成績を取ることができるかどうかを判断することで、専攻科に進学できる程度の知識の定着度とその応用力を図るため。

・面接 (20 分程度)

- ・ 形態：グループによる面接試験
- ・ 内容：志望学生の動機・自己概念、短大生活の振り返り、ことばによる自己表現、専門的課題への興味関心の 4 観点より、ランダムに出題

・合否判定

<方法>

GPA、筆記試験、人物評価（面接含む）

<基準>

- ・ 筆記試験（明確な進学動機、保育・教育現場における問題解決力、保育・教育に関する問題における読解力）
- ・ 筆記試験（保育に係る個別学力試験の得点「保育原理」、「教育原理」、「社会的養護」、「子ども家庭福祉」、「社会福祉」、「保育の心理学」、「子どもの保健」、「保育実習理論」）
- ・ GPA（2 年間の学習成績の状況）
- ・ 人物評価（面接含む）（「本学への志望動機」「専門職・将来に対する目的意識」「資格取得に関する意欲」「他者との協調性」「言葉遣い・姿勢・話し方」）4 年一貫教育プログラムの評価（活動の様子、幼稚園実践活動の準備・教材研究の取り組み、幼稚園実践活動の実践・振り返り）
- ・ 実習評価（保育所及び幼稚園の実習成績の状況）

●専攻科 I 期入試：一般選抜

(注) 開催の予定であったが志願者がいなかったため実施せず。